

## 序

真つ白な雪の中で、そこだけ紅をさしたように鮮やかな椿の花。この屋敷の奥、家人さえも滅多に立ち入らない場所にいる彼は、雪の中の椿に似る。

一度も日に焼けたことのない白い肌。鮮やかな色の着物。美しい声を紡ぐ唇――そのどれもが、僕を惹きつけてやまないのだ。



三男坊に生まれたおかげで、わりと気楽な人生を送っていた。僕が大学に通う頃には長兄は勤め始めていて、家計の方も楽になってきたということで、都会の大学に行くことを許された。そんなわけである旧家に書生として下宿しながら大学に通うことになったのだが、旧家には旧家につきものの奇妙なしきたりがあった。

決して近づいてはいけないという、広い家の一角。そういうところに何かあるのかは、兄たちに教えられていた。旧家として外に出せないものを閉じ込めておく場所——たいていは座敷牢のようなものがあるらしい。

家人もほとんど近付かないその場所に、僕と同じ大学に通うこの家の一人息子の静真<sup>しずま</sup>が足繁く通っていることには気付いていた。大学では静<sup>しず</sup>さんと親しみを込めて呼ばれ、慕われている人が、そこに向かう時だけはやけに真剣な顔をしているのだ。かといって他人の家の秘密に深入りしてもいいことはないとわかっていたので、深くは考えないことにした。どうせ数年間住むだけの場所なのだから、詮索するのは得策ではない。

そんなわけで、大学と下宿の往復だけの淡々とした日々を送るうちに、いつしか屋敷の奥にあるものについて考えることはなくなっていた。



ある日のこと。その日は休講になってしまつて、大学内で暇をつぶすこともできず下宿先に戻つた。屋敷の中は静まり返つて、家人は留守にしているようだった。床を踏む音が聞こえるくらい静かだ。手洗いをして、二階にある部屋に行こうとした瞬間に微かに声が聞こえた気がした。

誰もいないはずなのに。気のせいだということにするには、あまりに鮮明な声だった。少しこもつたような、けれど不思議な温かみがある声。やけに耳に残る音の出所を探れば、それは立ち入つてはいけなと言われた場所から聞こえてくる。

深入りしてはいけない。けれど、少し覗いて見るだけなら。理性や恐怖心を、好奇心が軽く凌駕する。それだけその歌に惹かれてしまった。自分も趣味で歌を歌うから尚更だ。

複雑に折れ曲がつた廊下を抜け、音をさせないように、声を見失わないように歩く。廊下の奥には予想通りの座敷牢があつて、声はそこから聞こえていた。

柱の陰に隠れて、中の様子を窺う。見えたのは、自分と同じくらいの歳の頃の、鮮やかな赤色の着物を着た青年だった。ぼんやりと天井を仰ぎながら歌を歌っている。

まるで雪の中で咲く椿のようだと思った。日に焼けたことのない白い肌。けれども鮮やかに色づいているその声。その綺麗なものから目をそらせなくなってしまった。

「……文哉<sup>ふみや</sup>？」

急に背後から自分を呼ぶ声が聞こえて、驚いてしまった。ここには入ってはならないと言われていたから、見咎められたら追い出されるだけでは済まないかもしれない。おそろおそろ振り返ると、そこには外套を羽織ったままの静真さんが立っていた。

「別にいいよ。……知られて困るような大した秘密じゃないんだ」

「え？」

「俺以外だったらヤバかったかもしれないけどね」

さりげなく怖いことを言った後、静真さんは座敷牢に向かって迷いなく歩き始める。一瞬こちらを見た目が、ついて来いと言っていた。その後ろに隠れるようにして、古びた木の格子の前に立つ。

「——瑛介<sup>えいすけ</sup>」

「静くん！」

赤衣着物を翻らせるようにしてこちらへ向かつてくる様は、金魚のようにも見え  
る。きらきらと光を閉じ込めたような双眸が脳裏に焼きついた。

「今日、大学は？」

「先生たちが会議で休講になったんだ」

「そうなんだ」

この二人は一体どんな関係なのだろう。彼はなぜここに閉じ込められているのだ  
ろう。疑問に答えが与えられないまま、二人の他愛のない会話が続いた。痺れを切  
らして静真さんに声をかけると、瑛介と呼ばれたその人は珍しいものでも見るよう  
な目を僕に向けた。

「この前教えたよね？ 春からうちに下宿してる文哉って言うんだけど」

「何か並ぶとそっちの方が兄弟みたいだね。二人とも目が細……切れ長の目だし」

「文哉の方が目ないって」

さらっと失礼なことを言われた気がする。実際静真さんとは大して目の大きさが  
変わらないと思うのだけど。

「えーと……初めまして、文哉です」

この場合、宜しくと言っていいのかどうか迷った結果、余計なことは言わないこ

とにした。

「あ、そうそう。大学の近くの店で飴が安くなつてたんだよ」

静真さんがそう言うのと、懷から飴が入った袋を取り出した。色とりどりの飴のまわりにざらめがまぶしてあるものだ。静真さんが格子の隙間から少しだけ飴を持った手を入れると、瑛介さんは口でそれを受け取る。

「文哉も食べる？」

「じゃあ一ついただきます」

差し出された袋の中から水色の飴を選ぶ。けれどなかなかそれを口にする気にはならなかった。薄明かりに飴を透かしてみれば、床に落ちる光が少し青くなった。

「静くん、もういつこちようだい」

「えー、これ結構数少ないからまた明日ね」

「ぼく買いに行けないんだからもう一個ぐらいいいじゃん」

「虫歯になるよ？」

これが座敷牢の前の会話でなければ、他愛のない会話なのだけれど。届きそうで届かない手を伸ばして飴を要求する彼に、僕は手に持ったままの飴をそっと差し出した。白く細い指が青い球体をつまむ。

「ありがとう」

笑顔を浮かべた彼は、少し幼く見える。優しいね、なんて言われてしまう。飴をあげただけで優しい人だと言い出すのは五歳くらいまでだと思っていたので、若干照れくさく感じてしまった。

「あんま甘やかさないですよ？」

「あ、すいません」

静真さんには笑いながら言われた。笑っているあたり、静真さんも相当甘やかしている気がする。けれどあえて指摘することはしなかった。

しばらくの間、静真さんは大学であった面白い話なんかを喋っていて、瑛介さんはそれを聞いているのかと思いきや全然関係ないことを考えている顔をしたりしていた。これが二人の普段の姿なのだろう。一体二人はどんな関係なのか。僕は時々口を挟みながら、格子越しの奇妙な日常を眺めていた。

屋敷の中央にある柱時計が六つ音を鳴らす。いつもならそろそろ家人が帰ってくる時間だ。それは二人もわかっているのか、そろそろ戻らなきゃ、と話をしている。二人の視線が離れるその瞬間に見えた表情は、今日二人が見せていたどの顔とも違っていった。切なげで、艶っぽいような、恋人同士の別れにも似ていた。その表情が引かなかったけれど僕は何も聞けないまま、静真さんに続いてその場を後にした。

そのあと、静真さんの自室でずっと事情を説明された。要するに二人は腹違いの兄弟で、不義の子の存在を世の中に知られないためにあの場所に閉じ込められているのだという。僕にとっては小説か何かと思う話なのだが、旧家ともなるとそうではないらしい。

「……じゃあ、生まれたときからずっとあそこにいるんですか？」

「いや、五歳のときくらいかな」

それでも想像を絶するくらい長い期間だ。実は僕よりも一つ年上らしいから、五年間あの場所に閉じ込められていることになる。もし自分がその立場だったらと考へたらぞっとした。

「小さい頃はうちにも女中さんがいて、その人が色々世話を焼いてくれてただけど、五年前に結婚して出て行ったんだ。それ以降は俺しかあそこに近付かなくなつてね」

この家の窓からは椿の木が見える。静真さんが椿を見ながら目を細めると同時に、椿の花が一つ、花の形を保ったまま雪の上に落ちた。

「……嫌でなければけど、たまに話し相手になつてやってほしいなと思って」

「嫌ではないですけど……僕、話下手な方なんで」



「一人でいるよりはいいと思って。俺ばかりだと飽きるだろうし」  
自分でいいのだろうか。他に適任もないのだろうか。のんびりと生きてきた自分とはあまりに違いすぎる境遇に、何も言えなくなってしまった。



日の当たらない座敷牢の周囲は、冬は凍えるほど寒い。綿入りの着物を着て、厚手の羽織を着ても寒かった。少しでも体が暖まればいいと、お酒を持ってきたけれど、それも意味があるかどうかはわからない。

僕の足音に気付き、瑛介さんが格子の所まで近付いてくる。僅かな灯りしか与えられていない場所では、その血管が透けそうなくらい白い肌がなおさら浮かび上がるように見えた。

格子の前に腰掛ける。ここにいることを知られないように、音は極力立てないようにした。さっき覗いてきたら居間で何やら揉めていたので、しばらくは僕に注意は払われないだろうけれど。

「お酒飲むの？」

「まあ、それなりに」

意外だと言われる事が多いけれど、実は結構飲む方だ。教授からもらった酒をグラスに注ぐ。電気ブランというその酒は、飲むと口の中が少し痺れるような気がし

た。それなりに強い酒なのに、なぜか妙に飲みやすい。教授からは必ず氷水を用意して飲むようにと言われている。

「それ、何てお酒？」

「電氣ブランっていう、浅草にあるバーで出してるお酒です」

「飲んでみていい？」

「かなり強いですよ？」

ここの家の人は全く酒が飲めない体質だったはずだ。心配になって渋っていると、瑛介さんが笑った。

「ぼくは、それなりに飲めるから」

「そうなんですか」

「強いってわけじゃないけど、お酒は好きだよ」

食事を受け渡すための小さな扉から、ショットグラスを渡す。瑛介さんはグラスの半分ほど入っていた電氣ブランを二口ほどであっさり飲み干してしまった。

「これちょっとしかないんだからもっと大事に飲んでくださいよ」

「そうなの!? ごめんごめん」

空になったグラスが戻される。琥珀色の液体をそれに注いで、少しだけ飲んだ。「そういえば、ここの家お酒ないのにどうやって飲んだんですか？」

「鈴木さんが、ここ出てくときに忘れていったから」

鈴木さん、というのは五年前に結婚して出て行ったという女中のことだろう。グラスの半分まで酒を飲んだところで、また格子の向こう側にグラスを渡す。僕は、今度はもう一個グラスを持ってこようと密かに決めた。

「このお酒、自分で買ってきたの？」

「いえ。教授にもらったんです。酔っ払ったときに欲しいものをお願いすると大抵くれる人なので」

「面白そうだなだね」

「でも人見知りで話下手なので、講義はよくわかんないですよ」

自分の興味があること以外はわりと適当なところもあるので、楽な講義ではあるけれど。

大学の近くにある飲み屋に何本ものボトルをキープしているその教授の話をして、いる途中で、空のグラスが戻された。瑛介さんの口角が上がった楽しそうな表情は、酒の力によるものだろうか。口直しのための水を渡すと、瑛介さんはそれを半分だけ飲んだ。

「文哉くんは浅草って行ったことあるの？」

唐突な質問だと思ったけれど、そういえば電気ブランは浅草のバーで出されてい

る酒だと説明した気がする。下町の雰囲気が好きでたまに足を運んでいるけれど、いつも仲見世で軽く物を買う程度だ。書生の身は、あまりお金がないのだ。

「何年か前に浅草に劇場がたくさんできたって、静くんが言ってた」

「ああ、そうみたいです。……歌、好きなんですか？」

初めて会ったときも、そういうえば歌っていた。もう一度ショットグラスに電氣ブランを注いで、一口飲む。そろそろ酔いが回ってくる頃だ。

「どうなんだろう。好きなんだけど、他にもっと好きなことがあるかもしれない」

「……僕は好きですよ」

瑛介さんの言葉に含まれた意味が、小さな棘のように刺さった。外の世界にはたくさんのものがあるのに、瑛介さんはそのどれにも触れることなく生きてきたのだ。「兄が二人いて、なけなしのお金でレコード買ってきて、よくかけてました。劇場には行ったことないんですけど」

「ここにも、何枚かあるよ。鈴木さんが置いてったやつと、静真くんが買ってきてくれたやつ。昼間しか聞けないけど」

ここでの数少ない娯楽なのだろう。座敷の奥に一旦引っ込んだ瑛介さんは、その手にくだんのレコードを抱えて戻ってきた。その顔は宝物を自慢する子供みたいだ。「外国のものもあるんですね」

そのあたりはさすがに旧家ゆえなのだろうか。格子越しに宝物を見せられて、少し羨ましく思ってしまう。

「あ、これはうちにもありました」

数年前に大流行した曲。何度も聞いていたので歌えるようになってしまった曲を口ずさむ。すると、瑛介さんが何故か若干唇を尖らせた。

「どうしたんですか？」

「いや……なんか妙に上手いなと思ってムカついた」

「理不尽だこの人……」

負けず嫌いなのか、対抗して歌ってくる。声が居間の方まで届かないか少し心配になってしまった。

「他に最近の曲でなんか歌えるのないの？」

腹を立ててたわりにはそんなことを聞いてきたので、酒の力も手伝って、最近浅草で人気の歌手の曲を口ずさんだ。電気ブランをくれた教授が機嫌がいいときに歌っていることもある曲だ。

「それ何て曲？」

「『恋はやさし野辺の花よ』っていう、なんかのオペラの中の曲ですよ」

「そうなんだ」

一瞬で旋律を大体覚えたらしい瑛介さんが小さな声で歌う。心地よい音色に酔いしれそうになっているうちに、いつの間にかグラスが空になっていた。



そんな話をしたから、というわけではなく、その近くに用事があったので浅草に足を伸ばしてみた。下町はいつだって雑多な音で溢れている。行き交う人の服装も、ドレスのような服から袴まで多種多様だ。ここにいる人たちの中には劇場に向かう人もいるのだろう。残念ながら僕にはお金がないから無理だけれど。

最近、何をしていてもふとした瞬間に瑛介さんのことを考えてしまう。この話をしたら喜ぶんじゃないだろうかとか、これを買って行ったらどんな顔をするだろうかとか。そのせいで友人には恋人でもできたのかとかかわれるようになってしまった。

どちらかというと、弟とか甥っ子とかができた感覚だ。瑛介さんは年上だけれど、あの場所にずっといるせいで、物事をあまり知らない。そして純粹に見える。だから色々と喜んでくれそうなことを考えなくなるだけだ。それは多分、恋とは違う感情だろう。

仲見世通りをあてもなく歩く。賑やかな客引きの声の一つ一つに耳が取られた。

その中の一つの屋台に人だかりができていて、気になって覗いてみる。

そこは飴細工の屋台だった。うさぎだとか猫だとか、色々な形をした飴が売っているが、目玉は職人による実演販売のようだった。その手捌きを見ているうちにいつの間にか少ないはずのお金を払って商品を買ってしまった。椿の花をかたどった飴を買って、財布がすっかり寂しくなったところで、仲見世を離れて下宿に戻ることにした。

今日の昼間はみんな出払っていると聞いたから、まっすぐ座敷牢に向かう。寒々しく暗い長い廊下も、このときばかりは優しい表情をしているように見えた。

不意に、奥の方から声が聞こえてきた。この時間なら、静真さんがいるのかもしれない。深く考えずにいたけれど、やがてその声のただならぬ様子に気付いてしまった。

押し殺した声は体にまとわりつくように甘い。これ以上近付いてはいけなないと、知ってはいけないと思うのに、何かに引き寄せられるように、気配を殺して様子を窺ってしまう。そしてすぐに見なければよかったと後悔した。



開けられないはずの座敷牢の鍵は開いていた。自由になることだってできるのに、瑛介さんは縋り付くように白い手を静真さんに伸ばしている。肌には少し赤みが差していて、漏れる吐息が興奮を伝えていた。

「あっ……やっ……」

瑛介さんはかすかに身をよじって声を上げる。今にも涙がこぼれそうな潤んだ目や、快楽に耐えるように着物を握る指が目には焼き付いて離れなくなってしまった。

どうして、それを美しいとさえ思ってしまうのだろう。自分ではない男に組み敷かれて、快楽に耽るその姿。体の中心だけではなく、足も腕も絡めて、時折唇までも重ねている。まるでお互いに必死に縋りついているようにさえ見えた。

そんなところに入り込めるはずもない。けれど惹きつけられてしまう。僕は金縛りにあったかのように、その場に縫い止められてしまった。